



# ぼっこちゃんの棚

## 新年の始めに①

日本にキリスト教を 十六歳の誕生日を迎えたフランシスコ・サエ、改めて「光陰矢のピエルが生まれたのは「ごとし」と実感する。

五〇六年。生誕五百年 新年に入って二回は節目の二〇〇六年に カトリック教会独自のスペインの生地を巡礼「いつくしみの特別聖年」したのを機に書き始め について書いた。一般性た「巡礼の道」ももう はないのに、あえて取り十年目。私も先日、七 上げたのは、現代社会



赤ちゃんは汚れなき天使

がテロ、自然破壊、貧 まででもない。

富格差などで混迷を深 め、人類が大きな曲が り角に直面していると 思えてならないからだ。 国家や宗教などの枠 を越えて一人々々が生 きていく原動力に立ち返り、 どう共生するか、その ために何が今必要とさ れているかを考えた。が、 多少一人よがりであった かもしれない、お許しい ただきたい。

さて、私は三人の子 供に恵まれたが、正月 には外国に旅でもしてい ない限り全員が集う。 昨年九月、長男に待望 の赤ちゃんが産まれた。 結婚八年目に授かった 初めての内孫は男の子。 息子たちは「陽向(ひなた)と名付けた。勝 手に「ぼっこ」という愛 称をつける。そのぼっこ ちゃんを交えての初めて の正月の集い。その中心 が誰であったかは言う

我が家で赤ちゃんの泣き声が聞けるのは次女の娘以来。つまり二十年ぶりのことで、泣き声に歓声をあげ、笑顔に喜び、ウンチに大騒ぎ。全員の心を和ませてくれる。

どこかでその集いで一番の話題は絵本である。長女が読んだ、いや見たといった方がよいかもしれない絵本は次女に、そして長男に。さらに次女の娘へとバトンタッチ。「ぐりとぐら」「どろに住んでいるので、来



ぼっこちゃんの棚

ろんこハリー」「からすのパンやさん」など不思議に子供たちはよく覚えており、話が弾む。まだ三カ月余りで絵本は早過ぎると思うのだが、東京に住む長女は「零歳児からの絵本」などを見つけては我が家を送ってくる。そこで祭壇の下に「ぼっこちゃんの本棚」を作る。自分で絵本を見られるようになったら、手の届くところにした。車十分余り離れたところに住んでいるので、来

れは平和であることだ。赤ちゃんと家族みんなにいつくしみの心を振りまいてくれる。どの国の、どんな環境の赤ちゃんも汚れなき天使だ。その天使が健やかに成長できる環境をつくるのは、大人の仕事である。それは平和であることだ。